



講習会で配布された資料に熱心に目を通す出席者たち

が生まれた。濱野さんいわく、「日本の中学生より運動能力が格段に低い。小学生時代の運動経験の少なさが影響しているんじゃないかと思ったんです。モロッコの小学校では、週2回、体育がカリキュラムに組み込まれている。しかし、体育用具がない、教えられる人がいないなどの理由を付けて、ほとんど授業が行われていないのだ。

「小学校にも体育を普及したい」。そう考えた3人は、自ら活動の場を小学校にも広げていった。しかし、「体育なんか必要ない」と考えている先生が圧倒的に多い中で、一人一人の意識を変えていくには時間がかかる。「できないからやらない」というのではなく、体育の重要性を分

かってもらいたい。まずは先生たちが問題を共有し、共に考える場を。そこで濱野さんらはそれぞれの活動地で「体育講習会」を開催することにした。

体育講習会で日本のノウハウを伝える

2月17日、根波さんの活動地、シシャウアで体育講習会が開催された。出席者は彼の呼び掛けで集まった、小中学校の先生、教育支局の関係者ら50人近く。教育支局のアデラヒム・モクタディ学生課長も「国としても2012年まで緊急プランを策定し、小学校で体育が実施できるようインフラ整備を進めていきます。モロッコの未来を担う若者を育成するためにも、規律や仲間を尊ぶ心が学べる体育は重要。講習会を通じて、一人でも多くの先生が関心を持ってくれれば」と大きく期待していた。

午前中は3人の隊員により、ビデオや表を用いて、日本の体育教育についてのプレゼンテーションが行われた。根波さんの巡回先の一つ、イブン・シナ中学校のエルヤズディ・カリド校長は、「子どもの身体的な成長を促すための体力テスト、学習カードを使った授業の振り返りな

ら受け取る子、少し怖そうに逃げ回る子。どこにでも見られる、体育の授業風景だ。

ここは、アフリカ大陸の北の果て、モロッコ。根波さんは2008年6月から、世界遺産都市・マラケシュ郊外の町シシャウアで、中学校の体育の質向上を目指して活動が続いている。「体育の授業はあるんです。でも、指導者の育成やカリキュラムの構築、体育用具の不足など問題は山積み。体育を『教育』として定着させること。それが僕の活動です」。

また時を同じくして、南部のインズガンでは濱野真成さん、北部のテトゥアンでは室井

ど、日本の授業は一つ一つの活動に意味がある。体育は『スポーツ』である前に『教育』なんです。見習うべきところがたくさんあります」と関心を示していた。

そして午後。前日は河川が氾濫するほどの豪雨だったが、その日は見事に晴天。根波さんの教え子たち、スカル版鬼ごっこ、クバーラ、ドッジボール、ペットボトルを使った遊びなどの実技が披露された。どの競技も、ちょっとした工夫があれば、子どもたちの運動能力を最大限引き出すことができるものばかり。道具が十分になくても、体育はできる。先生たちも何らかのヒントを得ることができたようだ。

子どもたちが健全に成長できるように、体育教育を。講習会を通じて、モロッコの先生たちは3人の協力隊員とともにその思いを確かに胸に刻んでいた。ブツサリ小学校のサリヒ・アブ

デルワヒド校長は、「ユウジが来てから先生たちの意識も少しずつ変わりつつありますが、まだ彼に頼り切ってしまう。私が彼の信念を継いで、シシャウアのモデルとなる体育教育ができるように努めたい」と意欲を語ってくれた。

モロッコの青い空の下、子どもたちが体育の授業で元気に駆け回る。そんな光景が、一日でも早く、あちこちで見られる日が来ることを願う。



(上) 体育講習会の出席者らに手作りの体育用具を紹介する濱野さん
(左) 子どもたちに指示を出す根波さん。何をしても、まずはルールをしっかり教えてから、実技に入るのが彼の方針だ
(右) 日本の支援で建設されたシシャウアのファラビ中学校。「遠方の生徒のために女子寮も併設し、学校に通える子どもの数が確実に増えました」とケラリ・エル・ハッサン校長

ペットボトルと紙で作ったオリジナルの道具で、体育の授業を受ける子どもたち。すべては協力隊員のアイデアだ

「ビーツ!!」
コンクリートのグラウンドに、青年海外協力隊の根波優司さんの笛が響き渡る。

小学校で体育の授業が受けられない

「これからドッジボールを始めます！」
子どもたちは慣れた様子で2つのチームに分かれ、早速、ゲームが始まった。風のようにコートを行き交うボール。力いっぱいボールを投げる子、真正面か

研一さんが体育隊員として奮闘していた。根波さんを含む彼ら3人の活動先は、いずれも円借款によって建設された学校だ。JICAの支援を通じて、04年より、都市部から離れた5つの農村地域で101校の校舎が新設され、スポーツ用具などの物資も供与された。しかし、インフラだけあっても、指導者がいなければ教育は成り立たない。そこで各地域の教育支局に派遣されたのが、根波さん、濱野さん、室井さんの3人だった。

赴任当初、彼らは週3〜4つの中学校を巡回しながら、現地の子どもたちに体育を教えていた。しかしそのうち、一つの疑問

「モロッコの学校に体育を広めたい」。同じ信念を持つ、同世代(25歳)の室井さん(福島県)、濱野さん(京都府)、根波さん(広島県)[左から]のチームワークが実を結んだ

写真=久野真一(JICA広報室)



小中学校に
体育教育を広めよう

日本の小中高では当たり前前の「体育」の授業。しかし開発途上国では、進学に直接つながらない科目は後回しにされがちだ。モロッコも例外ではない。そこで立ち上がったのが、体育を指導する3人の青年海外協力隊員だった。

